

「熊本地震と女性たち」

平成28年4月に起こった熊本地震により、多くの尊い命が失われ、熊本城をはじめ、県内各地に甚大な被害がもたらされました。いまだに続く余震の中、少しずつですが着実に、復興に向けて動き出しています。

今回は、自ら被災しながらも、被災者支援活動に取り組む4組の方々にスポットを当て、話を伺いました。

東北から熊本へ、

「歌うママ防災士」が今だからこそ伝えたいこと



歌うママ防災士 柳原 志保さん

宮城県出身。東日本大震災で被災し、4年前に熊本県和水町へ移住。2児のママとして家族を支える一方、防災士の資格を取るなどライフワークとして防災に取り組む。

歌うママ防災士

東日本大震災で被災し、4年前に妹が暮らす熊本県和水町へ子ども2人と移住。和水町地域おこし協力隊や荒尾・玉名地域結婚サポートセンターに勤務しながら、震災体験を教訓に防災士の資格を取り、災害への備えをテーマに講演するなど防災をライフワークにして発信しています。

「防災の固いイメージを払拭したい―」女性だから、母親である自分だからこそ発信できることがある、またそういった方々にこそ防災について学んでもらいたいと思い、防災士に「ママ」とつけるようになりしました。また講演会で話したことを思い出してもらえるよう講演の最後に「花は咲く」をうたうので、肩書はいつしか「歌うママ防災士」となりました。

講演をしていく中で、これまでは自分の話に感動はしてくれるけれどもどこか他人事のようにとらえる人が多いように感じていました。今回の熊本地震は防災への意識を変えるきっかけになったのではないかと思います。

防災にこそ様々な視点を

東日本大震災の時は着の身着のまま避難したため、着替えの服や下着すら持ち出すことができませんでした。次第に支援物資も入ってきましたが、配るのが男性の場合、下着のサイズなど伝えにくかったことがあります。

「防災は男性」というイメージがあるかと思いますが、実際、防災士や地域の自主防災組織のメンバーも多くが男性です。しかし、それだと避難所運営などの際、考え方に偏りが出てしまい、女性にとって利

用しにくい場所になりかねません。防災こそ、男女共同参画の視点が大切です。私自身、パレアのリーダー研修に参加し訪れた東京で見た展示パネルがきっかけで、防災も男女共同参画とつながりがあることを知り、活動の広がりを感じました。



また、男性、女性というだけでなく、普段から世の中にはいろいろな立場の人がいるということに気づく必要があります。特に大災害時は人とのつながりや協力が大切です。声を出せない小さなお子さんや年配の方、身体の不自由な方、様々な人がいて、それぞれニーズが違うことに気づき、考え、行動してほしいです。

日常の延長線上に防災を

備えに「完璧」はありません。たとえば特売日にパスタを多めに買って置いてストックしておくなど、そういった日常の延長線上の備えが大切なことをもっと多くの人に知ってもらいたいです。

防災に大切なのは無理をしないこと。一歩が大変だと、踏み出すのが億劫になってしまいます。だからその一歩のハードルを下げることから考え、行動に移すことが防災に大切な意識です。

防災を忘れないために

私自身、東日本大震災の時は何の備えもしておらず、何もできませんでした。しかし、今回の熊本地震では普段からの備えもあり、地震後自分はどうしたらいいか想定ができていたため、怯える子どもにも「窓と玄関を開けたからすぐ逃げられるよ。大丈夫

だよ」と声掛けし、安心を伝えてあげることができました。今回被災された方にも「こうしておけばよかった」と思われる方も多いでしょう。実際に被災したことで、県民の中に危機感が芽生えたと思います。しかしその危機感や防災意識は、どんどん忘れられてしまいます。「防災」が「窓」とならないように、実行に移していくことが大切です。

歌うママ防災士として、災害を風化させてしまわないよう、あらゆる人々に向けて、これからも情報を発信していきます。



Yahoo! JAPANが取り組む「私たちの防災」に取り上げられました。

「私たちの防災-身近な防災、ママだからできること-」熊本県玉名郡和水篇として、Youtubeで見ることができます。